金賞

「いじめ」との関わり

横須賀市立武山中学校　三年　　竹　﨑　真　輝

私は、小学校時代を父の仕事の関係で沖縄で過ごした。その６年間は、自分にとって本当に最高の思い出だったと思う。しかし、その思い出の中でも、忘れられない出来事がある。それは、私が小学校高学年の時だった。

私のクラスには、いつもひかえめで、口数の少ない、おとなしい男の子がいた。その子は、ひかえめな性格からか、友達は少ないほうで、休み時間などはいつも一人で過ごしていた。最初は周りの子も、一緒に遊んであげたりしていたが、その子が給食の時間に、食べた物を戻してしまったりするようになると、だんだん席をくっつけるのをやめ、避けるようになっていた。時には、その子に冷たい言葉をかける子もいた。私は、それがいけない事だと分かっていたのにも関わらず、見ているだけで何も言う事ができなかった。

それからしばらくして、その子は学校をよく休むようになっていた。そんなある時、その子の父親が、私達の教室に入ってきた。そ

してその子の父は涙をこらえながら話し始めた。その子がひかえめな性格だという事、もっとその子に声をかけてあげてほしいという事、そして何より驚いたのが、彼が自殺をしようとしていた、という事実だった。その話を聞いて、自分達のしていた事の大きさに気付いた。気が付かないうちに、その子を、死まで追いつめていたのだ。私は、周りの子に冷たい言葉を言われても、じっと耐えていた男の子の顔を思い出すと、とても胸が苦しくなった。また、それと同時に心のどこかで、自分は直接その子と関わっていないのだから悪くない、などと思っていた愚かな自分もいた。いじめは、見ているだけでもいじめをしている事と同じなのに、自分はその事に気付くのが遅かった。何もしてあげられなかった自分が、とても小さく思えた。その子の父親は、話しながら小刻みに震えていた。同じ教室にいる子ども達が、自分の息子を死に追いつめたのだから、想像もできないような、悔しさと怒りだったに違いない。しかし、その子の父親の口調は、語りかけるように穏やかだった。私は、本当に申し訳なく思えた。

それから、いじめの中心人物だった人が、その子の家まで謝りに行き、その子も、再び学校に来るようになった。その子は、何もな

かったかのように周りの子に振るまっていた。自分を死に追いつめた子達を、まるで、許したかのようだった。私は、いじめられる側が強くなければいけない、という言葉を聞いた事があったが、それはただのいじめの正当化だと確信した。いじめをしていた私達の方が、よっぽど弱い人間で、いじめを受けていたその子の方が、本当に強い心を持った人間なのだと知った。以前、私もいじめを受けていた事があった。その男の子のように、クラス全員からのものではなく、いつも仲良くしていた子達からのものだった。自分の持ち物がなくなっている事など日常茶飯事で、毎日が辛かった。しかし、プライドが高かった私にとって、自分がいじめられている事など、誰にも打ち明ける事ができず、一人で泣く事も多かった。それから、私にいじめをしていた子達が謝ってくる事があったが、私は絶対に許す事はできず、その子達と仲良くなる事も二度となかった。しかし、その男の子は違った。自分を死にまで追いつめたクラスメイトを許し、何もなかったかのように、明るく振るまっていた。本当に彼を凄いと思った。

最近よく、ニュースや新聞で、いじめを原因に命を絶ってしまったという事件をよく目にする。そういう事件を聞く度にとても胸が

痛くなる。いじめをする側とされる側、二つの立場を経験した私にとって、思う事はたくさんある。私がいじめを受けていた時は、死んだ方がこんな辛い思いをしなくてすむんじゃないのか、と思う事もあった。でも、自分を必要としてくれている人の悲しむ顔を思うと、とてもそんな事できなかった。自分の周りに、たとえ一人でも力になってくれる人がいれば、いじめを受けている人にとっては、とても大きな力になる。そして何より、いじめは悪い事だと知っているし、やられる側は辛いと分かっているのにも関わらず、やめなよの一言がなかなか言えない人も多いと思う。確かにいじめをやめさせる事は、すごく勇気のいる事だと思う。しかし、いじめを受けている側は、誰かのその一言を待っているのだ。その一言があるかないかで、いじめを受けている側の人生が変わる事だってあると思う。私は、この小学校での出来事から学んだ事を忘れずに、これからの生活を送っていきたい。

「いじめがこの世からなくなる事はない。」という言葉をよく耳にするが、私は一人一人の努力次第でいくらでも減るものだと思っている。いつの日か、いじめのない平和な世の中になる時が来ると、私は信じる。